

げられる。こうした言説もまた、脳死臓器移植のような人体を功利的に道具として利用しようとするシステムにおいて、その本質を隠蔽するために使われる言説システム（「いのちの贈り物」「いのちのリレー」）にたやすく取り込まれてしまう。また、「見えやすい弱者」だけを盾にとつて「見えにくい」弱者を犠牲にする臓器移植の言説構造それ自体を批判的に認識することなしには、一体どうしたら「弱者に寄り添う」ことになるのかも明らかではない。

このように、「いのち」をめぐる宗教的言説は、現代においていのちの分断・管理・蹂躪がどのようなかたちで起こっているのかについての現実認識と批判的想像力を伴わないかぎり、いま、ここで生きる私たちの「いのち」の可能性を開くものとはならないだろう。

「いのち」を生きることの困難

—— 僧侶の病床訪問活動から ——

大河内大博

「いのち」の現場の一つである医療現場において、僧侶である筆者は主にスピリチュアルケアの担い手として、臨床実践の機会を得てきた。それはつまり、宗教者であることを全面とせず、スピリチュアルケアの提供者という立場をとることが、筆者にとつても、また活動を許容する医療者側にとつても、現在の医療現場において、有意義である点が大いということであった。

しかし、これまで活動するなかで、果たして宗教者としての

視点を極力出さないように注意しながらのケアが、「いのち」の現場において、死にゆくことや、死別の苦しみなどといった「思い通りにならない命」を生きる患者の苦悩や問いへのケアとして十分なものであったのだろうか。自らの反省も込めて、いくつかの問題点を指摘してみたい。

まず一番目に、医療現場において、ケアの対象となる事象は、客観的に捉えられてから対応されることが多い。だが、病や死を意識した時に持つ苦悩や問いとは、常に内在するものであり、それらが表面化されてからケアをする対処的発想では、不十分なものとなる。そのため、患者への姿勢として、患者の苦悩や問いのもとに「踏み込んでいくこと」を自問する姿勢が求められるが、それを極端に躊躇する傾向が医療現場に根強い。それでは、患者の本当の苦悩や問いに目を背けていると言わねばならない。

二番目に、医療的対応に多く見られる問題解決型・予防型の発想に、患者の苦悩や問いまでも取り込んでいく。しかし、病や死に向き合うことで生じる苦悩や問いを、他者が取り除こうとしたり、それらが起こらないようにしたりすることは本来出来得ないことであり、「いのち」を生きることの阻害するアプローチであると言わねばならない。

三番目に、患者の苦悩や問いは、整理された言葉で自発的に発せられるわけではない。そのため、患者自身もまだ出会っていない、混沌とした患者の言葉を紡いでいく「場」を喚起し、「対話」していく力をもったケア提供者が医療現場には求められるはずである。そのために必要な死生観や宗教的言説を理解

する土壌が、現在の医療現場には失われている。

最後四番目に、患者が直面する様々な選択の背景には、人生を総動員したうえでの決断がある。それは決して医療者の論理に適合するものではなく、極めて個別的な価値観のもと決断されてゆくものである。そのため、医療者の理屈ではなく、人生観などの患者の主観世界にまで掘り下がって自己決定を支え、その選択の証人となっていくケア提供者が求められてくるはずであるが、重要視されていない。

以上のように、医療現場には、

- (一) 患者の苦悩や問いを、常に内在するものとして捉え
- (二) その苦悩や問いのままにある患者を受けとめ
- (三) 時に喚起的に、患者の死生観や宗教的言説を紡ぎ
- (四) その人生を総動員した自己決定プロセスの同伴と生き
ざるの証人となる

ことのできる存在が求められてくる。こうした対話を通して、患者はたとえ不完全であったとしても、最期まで自らの力で「生ききる」実感を持つのではないだろうか。

仏教は本来、解決しえない苦悩をもった人間への関心を出発点とし、苦悩のなかで、宗教的「いのち」の視座に生死の根元を差し向けていく。僧侶がスピリチュアルケアの担い手として医療に関わる際、チーム医療の一員としての立場を第一としつつも、やはり宗教者としても、患者が「生ききる」ために、苦悩や問いをそのまま受けとめ、宗教的「いのち」の視座を含む対話を通した寄り添う姿勢の必要性を示していく役割がある。

「選択」から「応答」へ

——いのちの倫理における宗教の役割——

空閑 厚樹

私たちは「いのち」をめぐる議論において、宗教者からの発言に何を期待しているのだろうか。

医療を含む科学技術の急速な進展は私たちに新たな倫理的問題をつきつけることになった。そして、これらの問題に対する明快な解答を私たちは持ち合わせておらず、混乱の中にあるといっていだろうか。このような状況の中で私たちが宗教に期待しているのは、確固たる「世界観」の提示ではないだろうか。宗教的な教えが提示する世界観は、私たちの人生に意味を与え、人間の生や死にも意味を与えてくれる。この世界観が社会で広く共有されていれば、宗教者の発言は重みを持ち、私たちは医療技術の進展にともなう新たな倫理的問題に対して明快な決断を下すことができるだろう。そしてこれは倫理的ジレンマに対する「処方箋」となりうる。

しかし、世俗化が進み価値観が多元化した現代社会において、このような意味で宗教に期待を寄せることは、「ないものねだり」となる可能性が高い。なぜならそうした多元的な社会において宗教的教えは、その宗教を信仰する信徒に対してのみ影響力を持つものだからだ。また、たとえば単一の宗教が社会のマジョリティを占めていても、いわゆる工業「先進」諸国においては、かつては社会的に大きな影響力を持っていた伝統的な宗教が多かれ少なかれ形骸化し、「名目上」寺や教会などに属しているに過ぎないような信徒が増えていることを考えれば、